

第 1 部

コミッサオン・チ・フレンチ「勇敢な騎士、カッパドキアの戦士、聖ジョルジが、我らの道を開き、照らす」

振付 アウグスト・ヴァルガス、マルルス・フラーガ、フィヂグラン・バホス、ハイムンド・ホドリゲス

人と馬との関係は千年単位の長きにわたる。その繋がりを表現しつつ、ベイジャ・フロールの守護聖人である聖ジョルジ（セント・ジョージ／聖ゲオルギウス）およびそれに従う戦士たちが観客に挨拶し、パレードの始まりを告げる。

メストリ・サラとポルタ・バンデイラ（第 1 ペア）クラウヂーニョとセウミーニャ・ソヒーゾ「竜と姫の伝説」

伝説に言う。かつて一匹の竜が自らへの供え物として若い娘を要求し続け、ついに王の娘が最後の生贄候補となった。しかし、そこに現れた聖ジョルジは、この怪獣に立ち向かい、自らの槍を用いてこれを屠った。

第 1 アーラ「壁画」

穴居生活の時代、人は自分の活動を石の壁に描くことで記録した。こうした壁画にも、馬の姿を見ることができる。

第 1 山車「原始時代の起源、馬の夜明け、そして進化」

全ての種がそうであったように、馬も気候の変化に適応しなければならなかった。たった 40cm の小動物から、我々が今日知る馬の姿にいたるまで、様々な段階を経てきた。

第 2 部

第 2 アーラ「沼地」

何百万年も前、野ウサギのような姿をした小さな哺乳類が沼地を走り回っていた。これが今日の馬の祖先にあたる。

メストリ・サラとポルタ・バンデイラ（第 2 ペア）ダヴィとフェルナンダ「緑の草地——新しい食糧」

環境の変化のひとつに、沼地から草地への変化がある。これが馬の変異に大きな影響をおよぼした。

第 3 アーラ「広大な草地」

気候の変化に伴い、地球はより乾燥し、沼地は草地にその場を譲った。馬は、エオヒップス（ヒラ

コテリウム)から、より大きく筋肉の発達したメソヒップスへと進化した。

第 4 アーラ 「進化した動物——エクウス」

何段階かの変異を経て、より現在の馬に近い姿をしたエクウスが現れた。小柄で、たくましく、繁殖力が強く、厳しい気候にも耐え、世界中に広がった。

第 5 アーラ 「氷河期」

中央アジアに暮らしていたターパンは、アラブ種の馬の祖先で、森の動物と平地の動物との間の混交が起こった氷河期に進化した。

第 6 アーラ 「耕耘」

進化過程を経て、種、体格、形態、毛並等に大きな多様性がもたらされた。馬はまた、人間によって耕耘に利用されるようになった。

第 2 山車 「旅する者の忠良なる友、運輸、通商、農業」

馬ほど、人類の歴史に影響を与えた動物はない。耕作、人と物の輸送、そしてトロイの木馬に見られるように戦争にも活用された。

第 3 部

第 7 アーラ 「旧世界の覇者——アレキサンダー大王」

愛馬ブケパロスに跨ったマケドニア王アレクサンドロス 3 世(アレキサンダー大王)は、史上有数の広大な版図を誇った大王国の指導者である。

第 8 アーラ 「十字軍——テンブル騎士団」

十字軍の時代、聖地エルサレムへ向かう巡礼者の保護を目的に結成された騎士団。そのシンボルは一頭の馬に乗る 2 人の騎士の姿だった。

第 9 アーラ 「ギリシャ人の贈り物——トロイの木馬」(小出車を含む)

古代ギリシャの時代、スパルタの王妃ヘレネーがトロイアの王子とともに逃げ、これが戦争のきっかけとなった。スパルタがトロイアの街へ侵攻するべく作り上げた仕掛けは、木製の巨大な馬だった。神への捧げものとして受け取られたその中には、スパルタの兵士たちが忍んでいた。

第 10 アーラ 「円卓の騎士」

伝説の王アーサーに従う円卓の騎士たちがまたがる馬たちも、英雄的行動で知られている。

第 11 アーラ 「モンゴル、草原の皇帝チンギス・ハーン」

モンゴル人をまとめ上げて皇帝となったチンギス・ハーンは、数えきれない戦いの中で、革新的な騎馬隊の運用を行った。

メストリ・サラとポルタ・バンデイラ(第 3 ペア) ウーゴ・セザールとナニーニャ・フィデリス 「秦の兵馬俑」

中国最古の皇帝である秦の始皇帝の陵に置かれた兵馬俑は、8 千以上の兵士および軍馬の姿を粘土で作りだしたものである。

第 12 アーラ 「皇帝の焼物軍隊」

秦の始皇帝に捧げられた焼物の兵士と軍馬の姿を実物大で表現する。

第 3 山車 「大文明圏の勃興——アレキサンダー大王」

かつて国際紛争において、馬は欠かせない要素だった。アレキサンダー大王も愛馬ブケパロスに跨り、広大な勢力圏獲得を成し遂げた。

第 4 部

第 13 アーラ 「魔法の力——ユニコーン」

ユニコーンは、純潔さや力と関連付けて語られる伝説上の動物で、馬のような体をして、額から 1 本の巻角が突き出ている。

第 14 アーラ 「馬人間——ケンタウロス」

ギリシャ神話に現れるケンタウロスは、人間の胴と頭、そして馬の身体を持つ生き物である。

第 15 アーラ 「翼を得て無限の彼方へ——ペガサス」

ペガサスは、翼のある馬で、不死の象徴として、ギリシャ神話に登場する。ペルセウスがメドゥーサを倒す際に、その助力となった。

第 16 アーラ シャーマニズム——精神の自由、力、洞察力

呪術・祈祷の世界で馬は、内なる力、精神の自由、力、洞察力などを意味する。現実界においても精神界においても旅の安全を守る手段である。

第 17 アーラ 「ヒンドゥーの馬の魔力」

ヒンドゥーの人々は、やがてカルキ神が馬に跨って現れ、闇と悪の時代の終わりを告げると信じている。

ムーザ・ダス・パシスタス シャルレーニ・コスタ 「ジプシーの官能」

第 18 アーラ(パシスタス) 「ジプシーの魔力」

ジプシー(ロマ)は陽気な遊牧民で、生活用具を馬や馬車で運び、移住を続けている。

インテルプレッチ(プシャドール) ネギーニョ・ダ・ベイジャ・フロール

ハイニャ・ヂ・バテリア ハイッサ・オリベイラ 「ジプシーの宝」

第 19 アーラ(バテリア) 「ジプシーの力」

ジプシーの集落にて、明るい伝統的な祭の楽器の音が静寂を破る。

第 20 アーラ(バイアーナス) 「ジプシーの老婦人」

ジプシーの族長が亡くなると、持ち馬が生贄として焼かれるという風習があった。飼い主である故人の魂を天国へと運ばせるためである。

第 21 アーラ 「ジプシーの踊り」

ジプシーの祭には、回りくねる踊り、そしてギター弾きが溢れる。歌と踊りに満ちた祭は 3 日間続くこともある。

第 22 アーラ 「ジプシーの力」

ジプシーの遊牧生活スタイルにとって馬は欠かせない存在である。

第 4 山車 「ジプシーの清めの炎」

独特な神殿に奉られた、ジプシーの黒き守護聖女サラ・カリが、この謎多き人々を祝福し、守護する。旅道中の忠実なパートナーである馬は、道と森の主とみなされている。馬は、飼い主が亡くなった際に聖なる炎で清められ、飼い主の魂を天国へと運ぶ。

第 5 部

第 23 アーラ ドイツ種——遺伝的影響

ドイツ馬は、アンダルー(アンダルシアン)種の起源である 3 種のひとつであり、その遺伝的特徴はマンガラルガ・マルシャドールにも受け継がれている。

第 24 アーラ 「歩く騎士」

イベリア半島発祥の馬種であるアンダルースを、ラ・マンチャのドン・キホーテの相棒であるロシナンテになぞらえて表現する。

第 25 アーラ 「アラーの宝石——ベドウィン」

アフリカ北部のベドウィン族に利用されていたベルベル（バーバー／アラブ）種の馬も、アンダルースの、そしてマンガラルガの起源種のひとつである。

第 26 アーラ 「連合王国のジョージ 3 世」

ジョージ 3 世の治世下、マンガラルガの起源のひとつであるアルテ・レアル種の遺伝子形成にイギリスの牝馬が貢献した。

第 27 アーラ 「王家の乗馬」

アルテ・レアルは、ポルトガルで貴族向けに開発された馬種である。賢く、美しく、ヨーロッパ各地の貴族に向けた贈り物として利用された。

第 5 山車 「天駆ける星——ポルトガル王室のアルテ・レアル」

アルテ・レアル種の繁殖と改良のために立ち上げられた王立厩舎は、栄光の 18 世紀の活動を今に伝える、ポルトガルの文化遺産である。

第 6 部

第 28 アーラ 「ブラジル総督トメ・デ・ソウザ」

16 世紀、初代ブラジル総督トメ・デ・ソウザとともにブラジルに初めてやってきた馬の様子を表現する。

第 29 アーラ 「コーヒーがもたらした富」

馬は、エストラーダ・ヘアウ（王の道）を通して、ブラジルに富をもたらすコーヒーを運んだ。

第 30 アーラ 「鉱業がもたらした富」

「金の時代」、馬は、ミナス・ジェライスで掘り出された富を、リオデジャネイロの宮廷へと運んだ。

第 31 アーラ 「王室の穀倉——ブラジルのミナス・ジェライス（＝多様な鉱物）」

ミナス・ジェライスの豊かな収穫と富は、食料品や各種産品が慢性的に不足していたリオデジャネイロの王室の需要を満たすうえで欠かせないものだった。

第 32 アーラ「トロペイロス(行商人)」

トロペイロと呼ばれる行商人たちは、馬に乗り、ラバの群れを率いて、産地と消費地の間を通い、品物や情報を運んだ。

第 6 山車「王の友——アウフェナス男爵」

アルテ・レアルの種牡馬と地元の牝馬との掛け合わせからマンガラルガが誕生し、ポルトガル王ジョアン 6 世からアウフェナス男爵へと下賜された厩舎で繁殖と改良が進められた。

第 7 部

第 33 アーラ「我が神の治め給うこの世界での騎行」

素朴、利便、素直といった気質から、マンガラルガは長距離旅行・騎行に適した馬とみなされるようになった。

第 34 アーラ「牧場仕事に生きる俊敏性」

マンガラルガ・マルシャドールの俊敏性は、牧場で牛を追う用途に適している。この俊敏さということも、同種の形成・選定・決定にあたって考慮された 3 つの要件のひとつである。

第 35 アーラ「田舎貴族の技能試験——狩猟」

勇敢さ、知性、そしてジャンプ力に優れるマンガラルガは、狩猟(現在は技能試験)の友としても評価が高い。

第 36 アーラ「ブラジルの馬種、マンガラルガ・マルシャドール」

マンガラルガはブラジル産の大変美しい馬種で、安定した歩行とおとなしい気質に定評があり、主要な特徴としてリズムカルな側対歩を行う。

第 37 アーラ(クリアンサス)「木馬の夢」

木馬は、幼少期の定番の遊具である。

第 38 アーラ「ベル・エポック——美の黄金時代」

ポルトガル王室の植民地ブラジルへの移転にともない、富と貴族的な洗練性、そして「ベル・エポック」の影響がもたらされた。

デスタッキ・チ・シャオン ジャケリーニ・ファリアス「ブラジルの王家」

第 7 山車「在伯の王都」

ポルトガル王室はブラジルに富と貴族的な洗練性をもたらした。「アール・ヌーヴォー」風の燭台、ステンドグラス、鏡、階段、古のリオデジャネイロの定番的風景。そこには馬車やマンガラルガに乗った人々が通る。

第 8 部

第 39 アーラ「ペアオン(雇われ農夫)」

ペアオンと呼ばれる大農場の従業員は、飼い馴らしや排せつ物の処理を含む家畜の世話を任されている。

第 40 アーラ「装蹄師」

マンガラルガの育成に携わる各種職人の中に、蹄鉄の装着・補修を担当する、装蹄師がいる。

第 41 アーラ「技能試験——乗馬技術」

乗馬には、騎手と馬との連携をとる能力が求められる。マンガラルガは乗馬の技能試験に用いられる。

第 42 アーラ「治療と癒し——ホース・セラピー」

気性がおとなしく、歩みが優しいマンガラルガは、セラピーや教育用途に活用されている。

第 43 アーラ「ブラジル産駒の拡大——輸出」

マンガラルガは世界中に輸出され、国境なき馬となった。

第 44 アーラ(ヴェーリャ・グウルダ)「馬のブリーダー」

マンガラルガのブリーダーの集まりである ABCGMM(ブラジル・マンガラルガ・マルシャドール馬ブリーダー協会)は、ブラジル全土にまたがって、協会員 6 千名以上、登録馬約 40 万頭を抱える。

デスタッキ・ヂ・シャオン カッシオ・ヂアス「黒い毛並」

第 8 山車「マンガラルガ・マルシャドール——国境なき馬」

私はマンガラルガ・マルシャドール！勝者であり、私の限界は空！私はベイジャ・フロールと遊びに来た、、、勇敢な戦士、忠良な友！